

野村芳兵衛の「訓練」と教科外活動の実際

——教育課程づくりへの子ども参加と相互評価——

水 崎 富 美

はじめに

新学習指導要領の実施にともない教育課程づくりとそれへの子ども参加のあり方、評価をめぐる多くの議論がなされている。特に、いわゆる教科外の領域は、子ども達の「表現」やそれを通しての「仲間づくり」、また教育課程づくりへの子どもの参加が注目されている。しかし、これらは日本では1920年代30年代に生まれた新教育の理論や実践において既に試みられてきたものでもある。本稿ではこの時期に実験学校として設立された池袋児童の村小学校の教師である野村芳兵衛の教科外活動の実践とそれを支える訓練理論とを「表現」、「仲間づくり」の視点から検討する。それによって今日の教科外活動での教育課程づくりへの子どもの参加の在り方及び子ども達による相互評価の手がかりを得たい。

いわゆる教科外の活動は近代日本において教育が「教授」・「訓練」として捉えられ、その「訓練」の具体化として組織化された。この「訓練」という概念は、1900年前後に成立し、普及したといわれる¹⁾。この時期普及した「訓練」はその後、野村をはじめとする新教育によって「圧迫的行動」とであると批判され、様々な「訓練」を越えようとする試みが展開された。

野村芳兵衛の理論と実践について教科外の領域を扱ったものには、藤田昌士の「訓練」(訓育)と学校行事についての一連の研究や門脇厚司、中野光のもの等がある²⁾。しかし、それらは実践の詳細について、「夏の学校」や運動会、遠足等を野村の「訓練」の思想形成と方法の意識化を含めて検討されたものではない。

また、君塚仁彦の「池袋児童の村小学校における『学校博物館活動』—博物館学の視点から見たその意義」は当校の学校博物館の実践を分析している。しかし、野村の池袋児童の村小学校の設立以来の教科外の活動に関する認識、教育観との関係からは分析されていない。

本稿ではまず、野村の岐阜師範附属学校時代から池袋児童の村小学校にかけての「訓練」に関する認識と教科外の組織化の理論について考察した後、池袋児童の村小学校の「夏の学校」・運動会・遠足に関する学校関係資料を用いて、教科外の活動の実際について明らかにする。なお、ここで野村の実践を明らかにするために考察の対象とする池袋児童の村小学校の子ども達は、いわゆる新教育の思想のもとに誕生した学校に通う、当時、エリートとはいわないまでも、画家や教師など、一定の階層の子ども達である。したがって、ここから直接今日の子ども参加や相互評価の適用を考えるには問題がある。しかし、ここでの実践を築いた教師は当時、日本の農村にどこにでもみられる田舎の百姓の出身であり、親鸞信徒であった。本稿が明らかにするように池袋児童の村小学校の教科外の実践はこの田舎の教師が、ヨーロッパ的な共同性ではない新たな「協働体」をつくるために、そのための主体として子ども達をどのように育てていくのかという問いの中で生まれたものであり、自らが育った田舎での生活、そして親鸞の思想に立ち帰りながらその方法を見出したものである。池袋児童の村小学校の子ども達の参加や相互評価は本稿で明らかにするように、この野村の「協働体」の創出の方法として見出されたものであり、それに裏付けられたものであった。したがって、それを可能にしたものが、特殊な階層の子ども達であったからのみなのか、この教師の発想や実践の展開の中に内在する要素なのかを分析するためには、まず、教科外活動の実際がどのようなものであったのか自体を明らかにする必要がある。以下、まず野村が「訓練」の認識と教科外をどう組織しようとしたのかについて、理論的な次元を野村の著作を中心として示し、その後、「夏の学校」、運動会、遠足についての実際を考察したい。

1 野村芳兵衛の「訓練」の認識と教科外の組織化の理論

野村は、初期の岐阜女子師範附属小学校教員時代に書いた論文では「訓練」を師範学校時代に学んだと思われる学校管理法的な方法、すなわち「模倣」・「自治」として認めていた。しかし、同時にそこで学んだ「褒賞」「叱責」「例え話」といった「訓練」方法については消極的な立場をとっている。そして、むしろ子どもと一緒に生活すること、働くことが「訓練」方法として必要であるとし、すでにこの時期には、後の生活教育につながる「訓練」認識を胚胎していた³⁾。

その後、池袋児童の村小学校に着任以降は、「訓練」を否定するようになっていく。着任1年の実践を著した『生命信順の修身新教授法』(1925年)では、「訓練」を「教師のもつ概念的理想に子どもをはめ込む鑄型教育以外の何物でもない。それでは自治創造の人を育てることはむづかしい」と否定し、「教授」と「訓練」という区別ではなく、教育は「もっとも生命的な総合的な形」で行なわれるべきだとする⁴⁾。しかし、このような認識の一方で、初期の池袋児童の村小学校での自由教育派の文化遺産の伝達、具体的には教科による系統的な教授活動の一切を教育悪の根源として退ける教育・訓練方法にも現実には失望していた。彼は当時について、子ども達に自由を与えれば、どんどん勉強をしだすと信じていたが実際はそうならなかったと述べている。

そして、この認識を変えたのが、池袋児童の村小学校でのいわゆる教科外の活動である「夏の学校」であった。野村は野尻湖半の「夏の学校」に参加し、ここで初めて生活の中で、遊びや勉強を通して、子ども達に「仲間作り」をさせていくならば、子ども達は要求したり、要求されたり、お願いしたり、励まされたり、励まされたりして、お互いに承認し合い、お互いに助け合い、お互いに競争し合って生きていくと実感するようになった⁵⁾。野村は、それを「生活のための生活による教育」とし、「生活のための」とは「守りあっておちつき」、「助け合ってたのしみ」、「教えあってはげむ」ことであり、「生活による」というのは、子ども自身が「やってみつける」「なって味わう」「見せ合って話す」ことであるとし、それは、「仲間づくり」によって可能であるという⁶⁾。

さらに、『新教育に於ける学級経営』(1926年)では、教育を伝統的な「教授」と「訓練」ではなく、「学

習」と「遊び」という二つの方向として捉えるようになる。そして、この遊びには、「野外の遊び」と「交友上の遊び」とがあり、この両方を「生活指導」と捉えた。「野外の遊び」には遠足、旅行、「夏の学校」などが、「交友上の遊び」には「ごっこ遊び」、「劇」、「出版」、「展覧会」、「夜の会」等、「倶楽部」がある。このように、いわゆる教科外の活動を組織化していった⁷⁾。

野村は当時一般に行われていた学芸会や遠足などのあり方に対して、我々教育家はともすれば「子供同士の交友は教育を破るもののやうに考えて」学芸会や遠足など、日本の民俗慣行に発して子どものあいだにもちこまれてきたものまでをも「学校」風に作りかえ「悉く学習事項の復習だとか発表だとか言う」観点からだけとり扱おうとしていると批判する。そして学芸会、発表会、遠足、展覧会は「当然子供たちの方から生まれることがら」であり、それらの仕事は学習事項の復習だとか、発表だとか云ふことにのみ考えるのは子供の遊びを奪っていると述べている。この「子供たちの方から生まれることがら」こそが野村の考える教科外の活動であった⁸⁾。以上のように野村は「訓練」を否定し、「協力」による「仲間づくり」とその方法としての教科外の組織化をおこなっていった。

「訓練」の再認識としての「生活訓練」

—後期『生活訓練と道德教育』(1932年)以降—

野村は1932年に『生活訓練と道德教育』を著し、それまでの「訓練」という用語への全くの否定ではなく「生活訓練」という用語を用いて「訓練」の必要性を説くようになる。野村は世界の教育界は教育の動機を子ども達の愛に求め、先ず子ども達の生活を解放し、子ども達自身に生活させることによって彼らの生活を指導しようとする生活教育を求め、そこでは生活解放、自発活動、個性尊重、行動の自由が教育の眼目とされ、圧迫的教育法、画一的教育法といったいわゆる「訓練」が強く否定されて来ていた。しかし、今再び「訓練」の必要性が出てきているというのである⁹⁾。

野村はそれ以前の『新教育における学級経営』(1926年)で「訓練」を否定して人間形成の方法を「協力」に見て、生活を協力的に創造していくことが、「協働体」を創出していこうと考えていたが、その「協力的」という言葉の中身については具体的方法を見出しては

いなかった。しかし、ここでは、「生活訓練」という方法を説いたのである。

野村における「生活訓練」の基本は「協働自治訓練」である。人と人とのつながりは単なる人格の自然的集合、人間の同情心とか、友情とか、同感の情というような主観的なものではない。それは、「協働自治」という「自治形態」を組織することによって創出されるという。その「協働自治」は、組織の持つ「功利」と成員の「興味」によって実践されていく。「功利」(公利)とは組織的な必要を意味し、「興味」は人格的、人情的な興味を意味する。それには二つあり、一つはみんなの要求を外から吟味して、約束する「功利」―物の分配や機会均等を作って行く約束―であり、もう一つは内から理解して合体して行く「公利」(愛情としての公利)である。前者は決議する手続きが、後者には話合う手続きが必要である。この「功利」と「興味」が、「集団自治」を構成していくとした¹⁰⁾。

さらに野村は「協働自治訓練プラン」を示し、「学習の協働」、「遊びの協力」(協働)、「集会の協働」というように項目をあげ、それぞれの「協働自治」のあり方を述べている。例えば「学習の協働」については「学習の共感又は反発は、各個人の利己欲を動機としてなすべきではなく、お互いの協働的責任と功利的喜びとによってなされねばならぬ」「一人の友が非常に数学のよく出来ることはその学級の利益として喜ぶべきだ。したがってその子どもが如何によく出来ても、その子どもが利己的であって、協働を意志しない場合には、断然反発して協働的抗議を提案せねばならぬ」とある。また、「遊びの協力」(協働)では「運動具の独占に対する統制」として、「個人使用の玩具は優先権を重んじていいけれども、学級に不満な子どもが多い場合には、競技用具使用の日割りを協議させることが必要だ」とある¹¹⁾。このように、集団的な自治が「抗議」「協議」によって運営されると考えた。これは、一見すると、集団自治というのが子ども同志で管理しあっていく極めて形式的な方法に見られるが、重要なのは、これらが常に「功利」に基づいてなされるものであり、この「功利」は所与のものとして予め外に存在するのではなく、「協議」と「抗議」という作業によって子ども達が「作り出す」ものであるという点である¹²⁾。

「訓練」の再認識以降の教科外の組織化

「訓練」の再認識以降は、これまでの「学習」と「遊び」(あるいは「生活」)を、「学習指導」と「生活指導」という二つのカテゴリーで捉えていたものを「学習指導」と「倶楽部指導」という二つに捉えなおした。「倶楽部指導」については、「学習の協働」、「遊びの協力」、「相談会」での「集会の協力」とルールづくり、「校舎整理の協働」など様々な機会について計画できることを提案している。

『生活学校と学習統制』では、カリキュラムは主として観念及び認識を中心とする「文化単位」と、主として情緒及び実践を中心とする「生活単位」との両方の面における学習によって認識と実践の総合「訓練」をしていくという。「文化単位」の学習は午前に配置し、午後は主として「生活単位」の学習にあてる。野村は午前は先生の時間、午後は子どもの時間であり、午前は過去の文化の伝承であり、午後は児童文化の創造であるとした。

午後の「生活単位」の学習では「外集」、「内集」が設けられ、「外集」は全校での遊びであり、子ども会を中心としてゲームや運動が自由にプロジェクトされた。そして、「内集」では、各学級の提案や意見が出され、「協議」され、検討された¹³⁾。「内集」には「相談会」があり、役員選挙、学級規約の決定、「協働学習プラン」など学級又は学校の問題の「協議」をしたり、先週の「倶楽部」で生まれた作品の発表と今週の「倶楽部」のための相談などが行われた。注目すべき点は「相談会」が学級の問題の相談だけではなく、「倶楽部」での子ども達の作品の発表という、文化を創造していくための「協議」と「抗議」の場でもあったという点である¹⁴⁾。子ども達自らが互いを「協議」、「抗議」によってぶつけることで自分を生かす力を社会的な仕事の分担の上で知り、自発的力としていく場であるとしたのである¹⁵⁾。

野村の考える「倶楽部」は最初から音楽、野球、写生など同好的に分かれて行われる「クラブ」¹⁶⁾といった能力を伸ばすことが主ではなく、「仲間作り」という民主的な人間形成が目的であった¹⁷⁾。したがって、音楽クラブ、野球クラブなどが各々の趣味によって分かれ組織されるのではなく、時には劇を「協議」し、劇を共演し、合評し、劇の会の記録を作り、時には旅行を「協議」し、旅行を「協働」経営し、旅行記にまとめるというように、全員であたるように構

成されていた。そこには運動会の経営、入学祝、卒業祝の催し、夕食会などもあった。このように午後にあたる「生活単位」の学習では、実際、子ども達が参加することによって「相談会」、計画・運営が日々繰り返され、その都度、子ども達自らの役割が生まれ、実現されていくようになっていた。この他、教科外の活動には「学芸会」や「夏の学校」、「青年会」、「母の会」が著作では組織されている¹⁸⁾。以下、「夏の学校」と運動会の実際について見てみたい。

2 「夏の学校」の実際

「夏の学校」は「原始自然の面影を残せる田舎を選び、自然生活をあじわわせる」ようにするものであり、池袋児童の村小学校の教育施設の中で最も重要なものであると位置付けられていた¹⁹⁾。これは、学校の創設の初期から行なわれ、1924年度は長野県の野尻湖へ行っている。それは次に示すような日程で行なわれた。

[1924(大正13)年度 野尻湖夏の学校]

- ・日程: 8月 1日 山のぼり
- 8月 2日 舟遊び
- 8月 4日 直江津行
- 8月 6日 田口温泉行
- 8月 8日 お伽会
- 8月 10日 お芝居ごっこ
- 8月 12日 展覧会
- 8月 14日 身体検査
- ・毎日の時間割
- 五時半 起床、検温
- 六時半 朝食(その後通信、日記)
- 八時 集合(十一時まで自然研究)
- 十一時 昼食
- 一時 水泳、午睡、検温
- 三時半 おやつ。夕食まで自由
- 六時 夕飯(就寝まで遊戯談話等)
- 八時 就寝²⁰⁾

翌1925年は千葉県の上総九十九里浜、1926、27年は軽井沢の奥の地蔵川へ、1928年は千葉県の保田へ行った。この時は保田で赤痢が出たため、中断され、その後、1934年²¹⁾、35年にはまた再開された。「夏の学校」の目的、教育的意味は「親自然」という考えに基づ

いている。この「親自然」については「児童の村プラン」の教育方針に見ることができる。

「自然は人類の郷土である。暖き陽光のあまねきところ、なごやかなる大気にあふれるところ、はてしなく奥深き土と、水とのうちに万物は生成する。児童の村の教育はつねに教室を校外にまで延長し、そこに感官を超越した大きな力が子供たちの魂の上に及びかけていくものであるを期待する。いわんや四時風物の変異育成するあり科学的にこれを研究すべく、実験場としても最も有価値なるものある」²²⁾。さらに、場所を移ることによって、「風物山川、世態人情の直感、学友との共同生活によって真の社会生活の味を味得する」ものであるとしている²³⁾

「親自然」に基づく「夏の学校」とは単に自然に親しむというだけではなく、四季風物を科学的に研究する「実験場」であり、「共同生活」による社会生活の獲得を目的としていたことがわかる。

初期の「夏の学校」に対する野村の認識と実際

野村は野尻湖畔の「夏の学校」での生活から生まれた子ども達同志の喜びの共有に、生活教育の一端があることを掴んだ。それは次のような記述からわかる。

「子ども達は美しい自然の中で、のびのびと遊んだ。朝の中は花を摘んだり、虫をとったりして、図鑑でしらべ、昼には、読書をしたり、時には、船で町の方へ出たりした。伝説をしらべたりした。やっと私にも、教科書の勉強は、一先ず別にして、教育には、こうした遊びから直接展開する、子どもらしい創造や研究が豊かにあるのだということが、わかるようになった。そして自然の中の子ども達というものを、勇敢に認めるべきだということがわかって来た。「子どもというものは、大人と違ったやり方で、結構生きていくもの」であり、お互いにけんかもし、仲良しにもなっていくということを理解し、同時に窒息しかかっている自分自身の「子ども性」(子ども観)を、解放してやらなくてはならぬと考えるようになっていったとも述べている²⁴⁾。

また、野村は、この「夏の学校」で子ども達が社会生活のために共同するということが可能となると考えた。九十九里の「夏の学校」の感想では、「環境が豊かなために子供たちが自分自身で遊びも学習もする。子供たちが乱暴、我儘だけに他人の我儘が理解

できる。そして普通のことは自分で解決していく。不快な気持ちが鬱積すると言ふやうなことがなくて、共同生活は形式的でなく、心情的にしんみり行くのでうれしく思う」。「夏の学校の効果は論じたり、予定したりは表面であり、そのありがたさは自然の懷に抱かれること、それ自身であること、ご飯を食べたり、一緒に寝たり、喧嘩をしたり、ないたりする共同生活それ自身にある。文化人のセンチメンタルな詩ではなく、忠実な生活から生まれる実感としての子供たちと共有した喜びがある」と述べている²⁵⁾。

さらに、「夏の学校」でしか味わうことが出来ないものとして「家庭の味」があるという。この「家庭の味」とは「子供たちと一しょに門に立って、夜の空を仰ぎながら星の話をしてやつたり、夕方の軒に忙しく網を張っている蜘蛛の巣をじっと興がったり、膝の上にのっかっている子供にお伽噺の本を読んでやつたりする」ものであった²⁶⁾。

後に野村は自伝で「夏の学校」に参加したことによって、「観念的な性格の私が、理性的な自由だけを考えていたために、見出しえなかった自由があることに気づいた」のは自分が「本性信順の生活者であり、伝承の生活者」であって、「子どもの野生を認め得たのも、親鸞の自然法爾に支えられて、ありのままに生きることこそ、一番正直な生き方」であるということの信仰があったからであったと述べている²⁷⁾。つまり、野村自身、この「夏の学校」によって自己の教育の足場を民衆の世界で受けた信仰と百姓の生活というところから再び捉え直したということができよう。

資料1に示したのは、1926年度の7月22日から8月4日まで14日間の群馬県地蔵川における「夏の学校」の活動内容である。ここでは1924年度の「夏の学校」とはかなり異なっている部分があることがわかる。

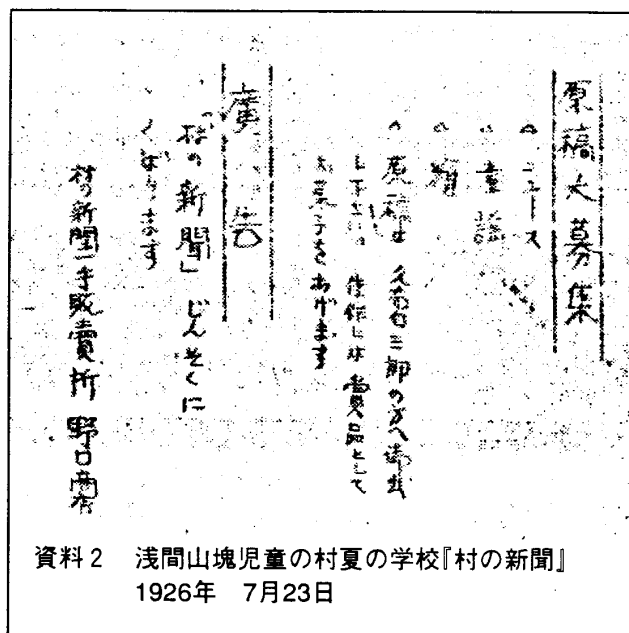
このプランを見ると午前にはノート学習、整理、研究、午後は遊戯が中心となっている。また、学習の参考として、星の観測、距離の実測、動・植物・好物採集、森の中のお話会、ペーゼント火山及び川の研究、昆虫飼育、気温の観測、伝説の研究、鉱泉の研究、自然物細工、写生等が掲げられて1925年の内容とも大きく異なっている。ここには自然に親しみ、懷に抱かれるだけでなく、観察を通じて自然を対象として捉えようとする方向性が見られる²⁸⁾。

午後一時半		午前五時半		一、時間表
自由学習	二時	起床	六時	
森のお話会	三時	床の始末・洗体 裸体体操・散歩	七時	
土いぢり		朝食		
川あそび	四時	書音機	八時	
池はり		学習		
写生等	五時	日記・通信	九時	
入浴		野外学習		
夕食	六時	動植物の採集 火山及び川の研究 鉱泉研究・写生 自然物細工など	十時	
書音機 散歩		研究 ノートの整理 押葉の整理 昆虫の飼育 伝説の研究		
室内遊戯	七時	昼食	正午	
就床	八時	午睡		
	九時		一時	

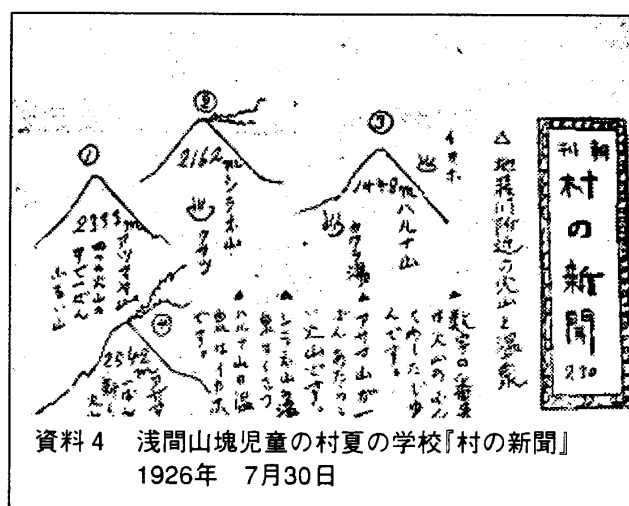
資料1 池袋児童の村小学校「夏の学校プラン」
1926年9月『教育の世紀』73頁より

子ども達からの表現の場の獲得と相互評価

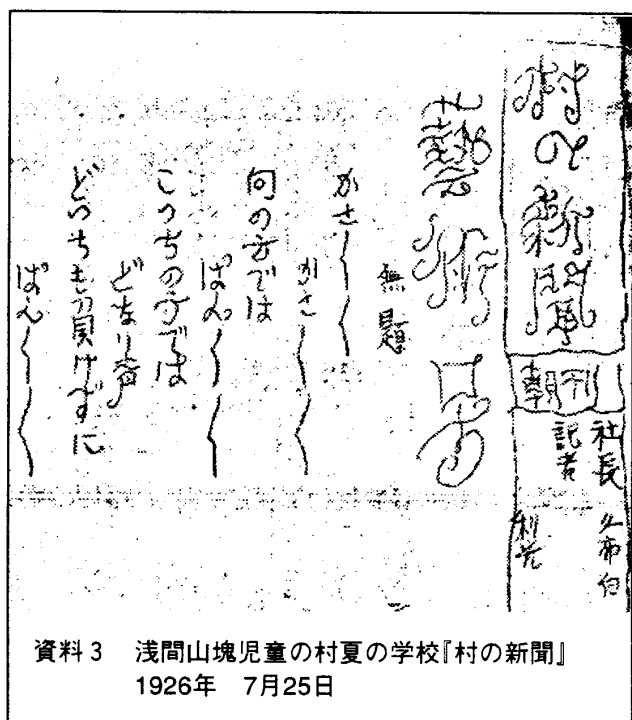
「夏の学校」ではさらに、子ども達自身から「村の新聞」という表現活動が誕生した。『村の新聞』自体は九十九里浜の「夏の学校」(1925年)の記録の中に「九十九里はまの夏の学校が開かれるについて、この『村の新聞』が生まれました。おもしろいことがらをどっさりのせます。愛読して下さい。みなさんのうちからも、どしどしおもしろいことがらを投書してください」とある。新聞は既に、1925年に発刊が始まっているが、これは、教師が夜に書いて発行していたものであった²⁹⁾。しかし、1926年の「夏の学校」では、子ども達の手で自主的に編集元が移された。1926年7月23日の記録「新聞記者」によれば、朝、『村の新聞』の朝刊を出したとき、子ども達が「はくたちでやる」と言い出し、早速子どもの新聞社が創立され、社長(久布白 6年)、記者(利光 5年、福沢 4年)、新聞配達(野口 4年 高垣 5年)の役割が決められたという。彼らは、地蔵川の地図を作成すると



資料2 浅間山塊児童の村夏の学校『村の新聞』
1926年 7月23日



資料4 浅間山塊児童の村夏の学校『村の新聞』
1926年 7月30日



資料3 浅間山塊児童の村夏の学校『村の新聞』
1926年 7月25日



資料5 浅間山塊児童の村夏の学校『村の新聞』
1926年 7月31日

いて、巻尺と紙と鉛筆、縄をもって外をあるき、取材をし、記事を書いた³⁰⁾。

資料2にあるように第一号では早速「原稿大募集」として「ニュース、童謡、絵、原稿は、久布白三郎の方へ御提出下さい。佳作には賞品としてお菓子をあ

げます」と書いている³¹⁾。

このように、子ども達によって、表現活動の場が獲得され、次々と生活が表現されるようになる。7月25日は「芸術号」として仲間の詩が掲載され(資料3)、7月30日には「夏の学校」の付近の火山と温泉に

ついでに自然の観察を載せている(資料4)³²⁾。そして、7月31日には絵画の作品が載せられている(資料5)³³⁾。ここで注目したいのが、この作品がまだ、未完成であるという点である。この絵については「平田女史のものでまだなかなかできあがらないものだということである。展示会は盛大にやるようで評判になるだろう」と書かれている。ここからは子ども達によって作品の制作途中の過程が示され、子どもによる作品づくりへの批評がなされ、制作を励ますことが新聞という表現活動を通して行われていたことがわかる。

このように、ここで行われていた表現活動は単に一日の日記や感想を表現するというものではなく、子ども達が相互に評価し、それを表現することによって励まされ、高められ、「仲間作り」がなされていくものであった。その後、1933年に執筆された『生活学校と学習統制』では、新聞について「学級自治の為に必要なる記事の報道をなすことによって、学級自治を高めて行かうとするものである」としてまとめられていくと述べており、それはまた、本作りとなって、生活綴方へとむかっていくのであった³⁴⁾。野村は後に「児童の村が、作文的教育法を発掘したのは、このクラブ学習によるものであった」と述べ³⁵⁾、池袋児童の村小学校における野村の生活綴方の発想は「夏の学校」によって野村が子どもの仲間同志のなかにある力を見出し、それを「倶楽部指導」というかたちで編成したことによって、生まれていったと考えられる。

1930年代以降の「夏の学校」の認識と実際

野村は1933年の『生活学校と学習統制』で「生活単位」の学習をさせること、子どもの時間を中心とさせた学習を目的としているのが「夏の学校」であると位置付けている。また、この「夏の学校」は第一に寝食を共にするので、子どもと先生との間に、心が通うようになるばかりでなく、子ども同志にも深い心の交流がうまれて、それが日頃の「仲間づくり」に大きく役立つと考えている。この「仲間づくり」は同好、人情的な仲間の交わりではなく、「仲間生活を豊かにするため」、「仲間生活の持っている問題を切り開くことができるようにする」ことのできるものであり、このことによって「協働体」社会がつくられていくとしたのであった³⁶⁾。

しかし、1935年8月号の『生活学校』での「夏の学校の経営」の記述ではこれまでと異なって、かなり学習の側面が組織され、細かい部分に教師の準備や指導がはいってくる。「夏の学校」で「本当に生き生きとした子供達の求知心を培ひ、学校家族の家族感情を豊かにさせ、職員も亦、同じ新鮮な生活感を把握したい」としつつも、その活動内容は、教科学習の指導、自然観察の指導、社会観察の指導、作業学習の指導、「生活訓練」とあり、生活態度の反省についても資料6の「反省表」にみるようにやや形式化している。

道	仕事	特選	備忘	備忘
末仲 もく 結	来て仲 た上 手く に出	りつ 用で 分し から たつ かや	新 規 備 忘	元 氣
同	同	同	方 だ け 備 忘	備 忘
同	同	同	方 だ け 備 忘	備 忘

資料6 「反省表」(『生活学校』1935年8月号より)

実際のこの時期の「夏の学校」について見てみたい。1934年の保田の「夏の学校」について戸塚廉の日記には多くの子どもとの遊びを中心とした生活が計画されていることがわかる。例えば、「七月二十五日 第六日 朝から雨が降っている。今日は午前水泳練習、午後運動会(陸と海)の予定だったがみんな落胆」。7月24日の日記では「午前中学習。日記と自由学習、新聞作り。自由学習の関係から時間がキリッとゆかず」とプログラムどおりには実際はいっていないとあり、さらに7月25日の日記では「内容は 夏の学校の歌、植物や貝殻の観察、手紙の朗読、新聞「ドンコ」の発表 日記の表れ発」とある³⁷⁾。教師と子どもの関係も、子どものひとは「保田の日記から」として、「戸塚先生に手をひっぱってもらった。僕は少し泳げるようになった。これでもう長く泳げればとても嬉しい。波乗りもゆうゆう出来るようになった。お昼からまた海に行った。潮がとても満ちて来ていた。一中略— 戸塚先生にふんどしを持って貰って泳いだ。口がからくてたまらなくなった。僕はとても嬉しい。海も好きになった」³⁸⁾とあり、ここでは子ども達の活動が教師たちの管理のもとに運営され、形式化されるというよりも、教師と子ども、子ども同志の交流が見られる。

3 運動会の実際

つぎに運動会の実際を見てみたい。運動会については池袋児童の村小学校の職員たちを中心に1925年に月例夜話会で「現下の体育問題」という議論がなされている。ここで野村は、運動が「選手の立派な腕を味はいたいと云うのではなく競争意識と云うことが主となっている」との問題性を指摘している。また、競技の見方についても指導すべきで、一等をとることがよいとは決まっておらず、勝負にばかり拘泥せず、評価の標準を変えることが必要だとする。そして、体育の世界も、「敵と協力しなければならん」という。また、「体育の根本は解放するに在り」とし、「訓練規律とやかましく云って子供を束縛しては駄目」であると述べている。ここにも、野村の規律訓練的な「訓練」に対する批判があらわれている³⁹⁾。

運動会についてのこの他の具体的な記述は、『新教育に於ける学級経営』や『生活教育と学習統制』ではあらわれないが、1935年9月の『生活学校』の巻頭言に見ることができる。

「運動もまた一つの生活である。従って、運動会と言う生活単位は、生活の全部、教育の全野に及んで、関わりを持たねばならぬ。(中略) 運動会をやることによって、子供達は、其処に、どんな子供社会を作っていくか。そして生活を如何に味ひ、如何に考へ、如何に組織して行くかを観ねばならぬ。だが、然し、本当な生活は何時でも健康体の中からのみ生まれる。野生こそは最も重んぜられるべき第一条件である。子供達をして愉快地運動せしめよ。子供達をして元気に運動せしめよ。彼らに彼らの情意で、この奔馬の手綱を引締めしめよ」⁴⁰⁾

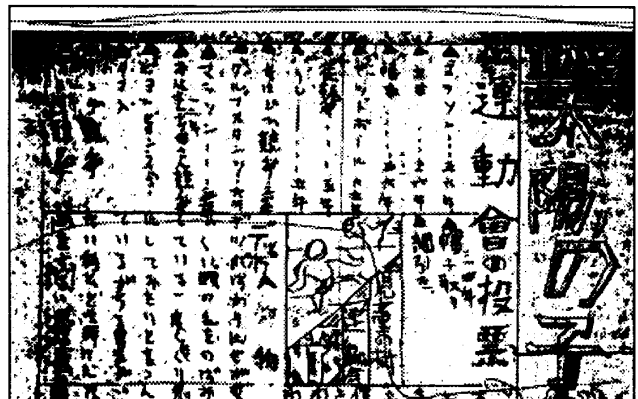
ここからは、運動会が体力の増強そのものではなく、そこに組織と社会をいかに考えつくっていくかを子ども達が認識し、行動するか、そこに運動会の価値があると捉えていることが窺える。

運動会づくりと子どもの参加

次に運動会の実際について見てみたい。村の小学校の子ども達発行の新聞『太陽の子供』(1934年の10月19日12号のNo.3)では「運動部」からの便りで、次の運動会について「運動会でやる物をみんなが□□

(二字読めず)の学校でやったものや□(一字読めず)でみた物でおもしろかった運動をこうどうにかかっている投票箱にかいて入て下さい」とある。

ここからは、まず、運動会の内容に子ども達が参加していたことがわかる。この、投票による内容とは資料7に示した『太陽の子供』(1934年10月19日12号No.1)のようなものであった。



資料7 池袋児童の村小学校B組
長子、吉方、平井、正夫、岩田、園田
『太陽の子供』12号1934年10月19日 No.1

さらに、10月26日の『太陽の子供』(1934年10月26日13号)には「運動会近し」と題して次のようにある(資料8)。



資料8 池袋児童の村小学校C組 出穂 山本、宏子
『太陽の子供』13号1934年10月26日

「運動会もせまってくるので各部さかんに活動しています。運動会の役割を言うと次のやうです。家庭部<予定・モギ店・受付>、集会部<おなじ>、図書部<レコード記録>、子供園<会場>、運動部<□体リーダー>(□一字読めず)、博物館、<号外・進行>、工場<道具>こんな役割であります。みんなちからいっぱいやってもらいたい」⁴¹⁾

ここからは、普段の子どもの「倶楽部」が、運動会に向けて各々の役割を果たすために相互に期待し、励ましていることがわかる。

また、同じく池袋児童の村小学校c組 出穂 山本、宏子『太陽の子供』13号1934年10月26日ではつぎのようにある。

「すぐ運動会で、毎日相談、れん習、道具づくりととてもいそがしかった。皆んなの赤ボースもそろった。徒競走のために椎の木も植えかへた。もう『僕等でやるんだ』が書けるし、一二年で使ふお面も出来た。プログラムも組んだ。各種のリーダーも定った。三四年の手で万国旗も書けた。まだ子供の門にアーチを作ろうとしているし、点数を入れる記録版もこしらへてゐる」。

このように「毎日、相談、練習、道具作りととてもいそがし」く、子ども達が自分達の準備のプロセスを自ら発見し、その達成度を確認し、つぎの課題を見つけ出していることがわかる⁴²⁾。ここでの教師については「戸塚先生はラッカーフィートの巻尺をメートルになほしている」という記述があり、また、戸塚の日記の10月26日には「終日運動会の準備。校旗作り、万国旗作り、テープ修繕、運び等」とあり、他の子ども達と同様に運動会を「協働」で作りをあげている様子がわかる⁴³⁾。

以上のように、運動会の内容から、準備に至るまでが子ども達の参加によってなされている。そして、自分たちの日々の活動が単なる感想ではなく、子ども達相互の励ましや批評空間として表現活動がなされている。運動会を終えた後の『太陽の子供』第14号には、「今度の運動会は今まで一番いい運動会だったと思ふ。記録道具進行会場皆よく働いた。去年よりずっと種目が多かったが去年よりずっとあきない、まごつかない運動会だった」⁴⁴⁾という記事がある。ここからは、一番に誰がなったというような成績よりも、係の働きや進行について、去年との比較などが批評されており、野村のいう「競争意識」が主になるのではなく、「運動会をやることによって、子供達は、其処にどんな子供社会を作っていくか」、「如何に考へ、如何に組織して行くか」ということが子ども達にも理解されていたといえる。

遠足・旅行の実際

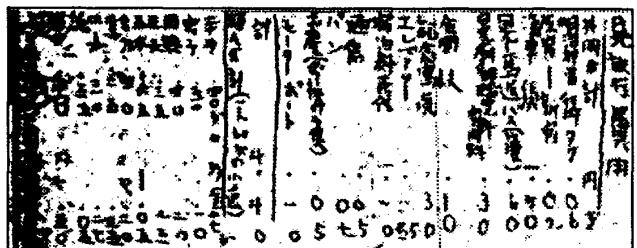
池袋児童の村小学校では、「夏の学校」の他に、春秋に旅行を催している。この旅行もまた生活による学習という主張から、「仲間作り」のための重要なプロジェクトとして教育計画の中に折り込まれていた⁴⁵⁾。

野村は遠足と旅行においてもまた、「協力」による「仲間づくり」を教育の目的としていた。したがって、当日の日程や仕事について子ども達が「協議」を行う。出発の一週間前から、毎日、午後になると子ども達自身によって地図を出したり、時間表を出し計画をたて、数人のグループに分かれて作業をすすめる。これら活動はあくまでも「仲間づくり」という民主的な人間形成が中心のねらいであって、同じ作業目標に向って自治的になされていくものであったという⁴⁶⁾。

1924年秋は日光、1925年春は箱根、秋は筑波から霞ヶ浦へ、1926年は春は伊香保秋は松島、1927年は春に妙義山、秋は塩原、1928年は春は日光、秋は関西、1929年は春に長瀨、秋に筑波から霞ヶ浦へ、翌年は中止で1931年は春に高尾山、秋に所沢、1932年には夏に江ノ島、秋に横須賀軍港、1933年は森永製菓と魚河岸に見学、1934年は春に村山貯水池、秋に日光に、1935年は動物園、奥多摩に出かけている。

『太陽の子供』14号 1934年11月(資料9)では1934年の秋の日光旅行の際の子ども達による遠足の報告がなされている。ここでは旅行費用についても掲載されており、経済的な観点からも自分達の「倶楽部」を見ていこうという子ども達の視点が窺える⁴⁷⁾。

遠足もまた「協働」のプロセスが重視され、それが旅行記として子ども達の新聞に表現され、合評され、反省されていったのである。



計	1000	31	3	600
1000	0	5	5	0500
0	0	0	0	0000

資料9 池袋児童の村小学校博物館太陽の子供社
『太陽の子供』(日光旅行特集)記者 第14号
1934年11月 3頁より

おわりに

本稿では野村の著作にみる「訓練」の認識形成と教科外の組織化についての理論を考察し、池袋児童の村小学校での実際の活動について検討してきた。池袋児童の村小学校の教科外の実践では運動会の演目を投票で決め、その手順も見出していたように子ども達が教育課程づくりへの参加が見られた。また、相互評価についても、作品の完成をまって相互を評価するのではなく、その創作過程を批評し、表現し互いに高めていこうというものであった。それは、子ども達の生活、「仲間づくり」を民主的な社会の形成の場としてとらえ、自発的な活動を導き出そうとする実践であった。このような実践の発想の根本はすでに見てきたように野村によれば最初の「夏の学校」の参加を通じて、再発見した民衆の世界において伝承された親鸞の思想と百姓の生活の中から得た子ども達の頃からの生活体験であったという。この親鸞思想と民衆の生活と「生活訓練」による「仲間づくり」との関係について今後、詳細に検討する必要がある。さらに、この実践を可能にした要素として、池袋児童の村小学校の教育方針に賛同し集まった子ども達やその親たちについての分析が必要である。これについては、当時の同じく新学校として実践が展開されていたその他の私立小学校との比較や公立小学校との比較が必要である。今後の課題としたい。

註

- 1) 藤田昌士 「訓育と学校行事」(『日本近代教育百年史』国立教育研究所 第四巻 学校教育 2 第四編) 1974年 215頁、219頁 - 220頁。
- 2) 先行研究には例えばつぎのようなものがある。藤田昌士「訓育と生活指導」(同上書 第五巻 学校教育 3 第六編)、門脇厚司「私立池袋児童の村小学校と教師たち」(『日本教員社会史研究』石戸谷哲夫・門脇厚司編 亜紀書房 1981年)、民間教育史料研究会編『教育の世紀社の総合的研究』一光社 1984年、中野光(ほか)『児童の村小学校』黎明書房1980年、君塚仁彦『池袋児童の村小学校における『学校博物館活動』』東京学芸大学紀要第1部門 1998年
- 3) 野村芳兵衛「私の信仰と修身教育」(1922年5月『初等教育雑誌』第23巻第5号 岐阜県教育委員会編『岐阜県教育史 資料編 近代三』1998年) 286-287頁。
- 4) 野村芳兵衛『生命信順の修身新教授法』1925年(『野村芳兵衛著作集 1巻』黎明書房1974年) 206頁。
- 5) 野村芳兵衛『私の歩んだ教育の道』1973年(『野村芳兵衛著

- 作集 8』黎明書房1973年) 160頁。
- 6) 野村芳兵衛 同上書 105-106頁。
 - 7) 野村は「教授」と「訓練」の区別を批判し、「もっとも生命的な総合的な形」を追求して、この「学習」と「遊び」という把握にいたった。したがって、「教授」と「訓練」という二つの区分を前提となされる、教科と教科外という区別は野村の「学習」と「遊び」という把握とは重ならない。したがって、ここで教科外の組織化という用語は十分ではない。しかし、ここでは、学芸会やその他の活動について教科外という用語で把握することになっている。なお、ここでは、「交友上の遊び」と「野外の遊び」の両方を教科外の活動として考察することにする。
 - 8) 野村芳兵衛『新教育に於ける学級経営』1926年(『野村芳兵衛著作集 2巻』黎明書房1973年) 33頁。
 - 9) 野村芳兵衛『生活訓練と道德教育』1932年(『野村芳兵衛著作集 3巻』黎明書房1973年) 64-65頁。
 - 10) 野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』136-137頁。
 - 11) 野村芳兵衛 前掲書『生活訓練と道德教育』112-114頁。
 - 12) 野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』136-137頁。
 - 13) 野村芳兵衛 前掲書『生活学校と学習統制』275頁。
 - 14) 野村芳兵衛 同上書275頁および野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』114頁。なお後者では児童の村時代についての「倶楽部指導」を「クラブ学習」と表現しているが、ここでは当時の用語で「倶楽部」指導と統一した。
 - 15) 野村芳兵衛 同上書275-276頁。
 - 16) 野村芳兵衛は戦後に書いた自伝では、戦後の普及したクラブを能力づくりのためのクラブとして自分の「倶楽部」とは異なるとしている。その際、当時の児童の村の「倶楽部」も、「クラブ」として表記している。ここでは、戦後のクラブについては「クラブ」と表記し、当時の児童の村については已むを得ない場合を除いて「倶楽部」と表記した。野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』113-114頁。
 - 17) 野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』112頁。
 - 18) 野村芳兵衛 前掲書『生活学校と学習統制』「目次」。考察は同書の140-217頁に及んでいる。
 - 19) 教育の世紀社 『私立池袋児童の村小学校要覧』1914年8月(1915年7月再版) 19頁。
 - 20) 志垣寛『教育に於ける原始的生活の価値—夏の学校の新意義—』『教育の世紀』第3巻第9号 1925年9月 38頁。
 - 21) 野村の自伝『私の歩んだ教育の道』110頁では1934年は休んだとあるが、戸塚の日記には「夏の学校」の記載がある。
 - 22) 教育の世紀社 前掲書『私立池袋児童の村小学校要覧』16頁。
 - 23) 志垣寛『教育に於ける原始的生活の価値—夏の学校の新意義—』『教育の世紀』第3巻第9号 1925年9月 38頁。
 - 24) 野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』94頁。
 - 25) [1925年度 九十九里夏の学校]の予定時間割は次のようなものであった。朝食・学習・郊外共同学習・昼食・独自行動・水泳・おやつ・独自行動・夕飯(散歩、蓄音

- 機、お話)・就床 池袋児童の村小学校「夏の学校だより」『教育の世紀』第3巻第9号 1925年9月 60頁。
- 26) 野村芳兵衛「野尻湖畔の生活」『教育の世紀』第2巻第9号 1924年9月 53頁。
- 27) 野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』 97頁。
- 28) 池袋児童の村小学校「夏の学校プラン」『教育の世紀』第4巻第9号 1926年9月 74頁。
- 29) 峰地光重 「九十九里浜の夏の生活」『教育の世紀』第3巻第9号 1925年9月 66頁。
- 30) 新聞は1925年の「夏の学校」でも発行されており、毎日発行したものを集めて「夏の学校」の終わりに父母に送ることにしたようであるが、この年から子どもが作成するようになったようである。池袋児童の村小学校「夏の学校だよりー夏の学校の生活一般」池袋児童の村小学校「浅間山麓夏の学校」『教育の世紀』1926年9月 第3巻第9号。
- 31) 浅間山塊児童の村夏の学校『村の新聞』1926年7月23日 謄写版刷り 民間教育史料研究会所蔵。
- 32) 浅間山塊児童の村夏の学校『村の新聞』1926年7月30日 謄写版刷り 民間教育史料研究会所蔵。
- 33) 浅間山塊児童の村夏の学校『村の新聞』1926年7月31日 謄写版刷り 民間教育史料研究会所蔵。
- 34) 野村芳兵衛 前掲書『生活学校と学習統制』276-278頁。
- 35) 野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』115頁。
- 36) 野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』108頁。
- 37) 戸塚廉『日記』1934年7月25日。
- 38) 野村純「保田日記から」児童の村小学校『夏たより』(『村だよりー夏休み通信ー』56号 1934年 8月。
- 39) 教育の世紀社 月例夜話会「現下の体育問題」『教育の世紀』第3巻第10号1925年10月 52-53頁および59頁。
- 40) 野村芳兵衛『生活学校』1935年 9月 巻頭言。
- 41) 池袋児童の村小学校C組 出穂 山本 宏子『太陽の子供』13号 1934年10月26日(謄写版刷り)
- 42) 池袋児童の村小学校C組 出穂 山本 宏子 同上。
- 43) 戸塚廉『日記』1934年10月26日。
- 44) 池袋児童の村小学校博物館 太陽の子供社 記者『太陽の子供』(日光旅行特集)第14号「運動会の感想」1934年11月1-3頁。ここでは1頁の部分を抜粋(謄写版刷り)。
- 45) 野村芳兵衛 前掲書『私の歩んだ教育の道』111頁。
- 46) 野村芳兵衛 前掲書『生活学校と学習統制』333-334頁。
- 47) 池袋児童の村小学校博物館 太陽の子供社『太陽の子供』(日光旅行特集)記者 第14号「運動会の感想」1934年11月3頁。